

参考資料 7

ヤンパク調整会議資料

第 1 回 ヤンパク調整会議

(平成 27 年 9 月 15 日 17:00~18:30)

第 2 回 ヤンパク調整会議

(平成 27 年 10 月 27 日 13:30~17:30)

第 3 回 ヤンパク調整会議

(平成 27 年 12 月 25 日 15:00~18:00)

第 4 回 ヤンパク調整会議

(平成 28 年 3 月 15 日 14:00~16:00)

第1回
ヤンパク調整会議
資料

平成 27 年度 農山漁村交流拠点整備事業
やんばる 3 村 会議（第 1 回）

平成 27 年 9 月 15 日（火）

17：00～18：30

会場 ぶながや館 会議室

会 次 第

1 開 会（挨 拶）

2 本年度の狙いと事業内容 (資料 1)

3 モデルスケジュールについて (資料 2)

4 ヤンパクのあり方について (資料 3)
・ 5 年後、10 年後の 3 村の姿について
・ 行動計画の進捗

5 今後の予定

6 閉 会

(以 上)

平成27年度 農山漁村交流拠点整備事業

やんばる3村 会議(第1回)出席者名簿

(敬称略)

番号	村	所属	役職	氏名	出欠
1	国頭村	結 ぐ に が み	理 事 長	服 部 吉 伸	○
2		〃	事 務 局 長	仲 本 美 智 子	○
3	大宜味村	おおぎみまるごと ツーリズム協会	理 事 長	宮 城 健 隆	○
4		〃	事 務 局 長	稲 福 元 子	○
5	東村	東村観光推進 協 議 会	理 事 長	吉 本 淳	○
6		〃	事 務 局 長	小 田 晃 久	○
7		〃		儀 間 し の ぶ	○
8	沖縄県	村づくり計画課	農村活性化推進 班 長	大 嶺 保 和	○
9		〃	主 任 技 師	崎 間 賀 子	○
10	事務局	OC		小 川 哲 平	○
11		OC		大 城 美 由 紀	○
12		A R J		大 島 重 久	○

平成 27 年度農山漁村交流拠点整備委託業務

実施計画書 (ヤンパク部分を抜粋)

平成 27 年 8 月

(株)オリエンタルコンサルタンツ・(株)アンカーリングジャパン 共同企業体

1. 業務の実施方針

(1) 現状と課題

①沖縄県における農林水産業

- わが国の経済・社会の国際化が進展するなかで、沖縄県における農林水産業・農山漁村の取り巻く環境は農林水産物の輸入増加や農林水産物価の低迷、農林漁業従事者の減少・高齢化の進行、遊休農地の顕在化など、多くの課題を抱えている。

②グリーン・ツーリズムへの取り組み

- このようななか、本県では、都市と農山漁村に住む人々が農林水産業を通じて交流を行うグリーン・ツーリズムの推進に期待が寄せられている。
- グリーン・ツーリズムは、沖縄らしい風景・景観の維持や県土の保全、伝統文化の継承や地域農林水産業の維持的発展社会の維持など多面的機能を有する農山漁村の活性化に有効であり、農林水産業の維持的発展および地域経済の発展のためにも重要である。
- 今後も、担い手の減少が継続するなか、修学旅行などの規模の大きな需要への対応や、地域が一体となってブランド価値を発信しつつ受入れを行っていくためには、取りまとめを行う中間組織や、これらが核となり地域間を結ぶ連携組織の必要性が高まっている。

(2) 過年度事業における成果と今後の問題意識

- このような背景のもと、平成 24 年度から農山漁村の交流拠点整備の取り組みが進められてきた。特に、これまでの取り組みでは本島モデルとして「やんばる3村（ヤンパク）」および離島モデルとして「いいな3村」が実践モデルとして拠点整備の推進が図られてきた。
- 本年度、本事業が最終年度を迎えるなか、各モデル地域で課題となっている事項の解決と、他地域への展開方策の立案が求められている。

<これまでの取り組みを踏まえた各モデルの本年度の問題意識>

項目	モデル毎の問題意識
ヤンパク	○窓口の一元化などの連携をより実効的なものにしていくためには、地域の実践者レベルの連携強化が不可欠であり、現場レベルの連携を進める施策が求められている。 ○上記の施策を進めるにあたって中心となるブランドコンセプトを再整理し、地域内に浸透させていく必要がある。 ○将来的な窓口の完全な一元化の実現。
いいな3村	○各村において、取組のオーソライズを進めるとともに、事務局体制の確立、これまで検討してきた取り組み（体験交流プログラム、コミュニティビジネス）の実践・検証レベルへの具体化が望まれる。 ○持続的な組織体制づくり。

（３）実施方針

○いいな３村

- ３村の連携拠点事務局の核となる人材の育成と、実践を両立しつつ取り組みの推進を図るべく、一部、いいな３村側に再委託を行いながら取組の実証を行う。
- ➔ 地域主体による実証を通じて、取り組みの推進を図る。
- ➔ 取組課題や解決方法などの取組経緯を検証し、地域ブランドを活用した地域補完型の“離島型”の連携モデルとしての知見を収集する。

○ヤンパク

- 現場レベルの連携強化を図るため、ヤンパクのブランドコンセプトを改めて定め、地域内への発信を行うとともに、交流連携を図るための仕掛けづくりを行う。
- ➔ ボトムアップによる連携強化に組み込み、さらなる連携発展を狙う。
- ➔ ブランドコンセプトづくりや地域内連携強化による拠点施策の推進について、効果や課題、今後の改善策について、今後の発展や他地域での展開の視点から検証する。

○全 般

- 他地域にとっても参考となり、実施のポイントや課題解決の理解促進につながるよう、拠点整備の取り組みを事例集として整理する。
- ➔ これまでの拠点整備の取り組みに対して、段階分けをして取組を整理。他地域における地域特性に応じた活用や、取組の難所や解決策が理解できるよう配慮。

2. 実施方法

広域連携組織の継続・発展に対する活動の促進（ヤンパク）

- ・ヤンパクの広域連携組織としての活動の継続・発展を促すために、3村関係者が出席する調整会議を3回開催する。本会議において、以下の活動を推進する。
 - 「ヤンパク」の活動の**求心力となるブランドコンセプトを確立**する。（コアメンバー※でのワークショップおよび、地域関係者との意見交換会を想定する。）
 - 「ヤンパク」での会員の勉強会・交流会の開催など活動の自走化に向けた活動計画づくりを行う。（産業まつりでのPR イベント、朝市など）
 - 「体験交流プログラム」の受入連携や、民泊農家さんのネットワークづくりを意識した交流会（全体ワークショップ）の実施。
 - 効果的な情報発信のための方策検討。
- ・また、いいな3村同様に**今後の長期的な発展性を見据えた組織や人材のあり方についても検討**を行う。

<出席者（※検討のコアメンバー）>

国 頭 村	合同会社結くにがみ 代表、事務局長
大宜味村	NPO 法人おおぎみまるとツーリズム協会 理事長、事務局長
東 村	NPO 法人東村観光推進協議会 理事長、事務局長

※各村行政とも情報共有を図るとともにオブザーバーとして参加をいただく。

<会議等の予定>

	実施事項
第1回 ヤンパク調整会議 (8月下旬)	・ 事業趣旨について、活動促進のあり方の調整 ・ 本年度の事業スケジュール、調整スケジュール ・ ブランドコンセプトのあり方について
第2回 ヤンパク調整会議 (11月中旬) (交流会の開催・1月)	・ ブランドコンセプトについての意見交換（ミニワークショップ） ・ 共同PRイベントの企画について ・ 交流会の企画について ・ 民泊ミニセミナー、ブランドコンセプト、意見交換 など
(3村内周知イベント ・ 2月)	・ 産業まつりにおけるブース出展（3村側が主体となって実施）
第3回 ヤンパク調整会議 (2月)	・ 取り組みの総括 ・ 今後課題に関する意見交換

<過年度の会議風景（やんばる3村）>



2.2 広域交流拠点モデル体制の普及に向けた事例集の作成

○ 広域交流拠点体制のあり方及び具体的な組織化の方策について、広域交流拠点の本島地域モデルである「ヤンパク」及び離島地域モデル「いいな3村」の体制づくりのプロセスについてグリーン・ツーリズムに取り組む団体、実践者に紹介する事例集を作成する。

(1) 事例集の狙い

- ・県内の農山漁村地域においては、今後も高齢化や人口減少が他地域よりも顕著に進行する。このような背景のもと、他地域にとっても参考となり、実施のポイントや課題解決の理解促進につながるよう、拠点整備の取り組みを事例集として整理する。

(2) 事例集の概要

- ・これまでの実際の取り組みに対して、一般的に想定される拠点組織立ち上げのステップに分けて整理し、地域の事情に合わせて活用できるよう配慮する。
- ・特に、**地理的に一体的な「本島モデル」と、遠隔の「離島モデル」では、連携のあり方や連携によるメリット、運営のあり方、連携体制立ち上げのあり方が大きく異なることから、地理的な特性にも着目し取組のポイントについて整理する。**

<広域交流拠点組織の立ち上げステップ>

ステップ	到達点	実施事項
STEP1	現状の共有	・地域内資源の把握 ・地域のグリーンツーリズムの方向性 ・課題の把握、組織の必要性の共有 ・地域間相互理解
STEP2	目的の合意	・共通課題に対する対応の検討 ・ビジョン・目標の検討 ・取り組みプランの基礎検討
STEP3-1	連携体制の立ち上げ	・ビジョン・目標の共有 ・取り組みプランの具体化 ・各村それぞれのスキル向上 ・運営資金の確保 ・連携組織・団体等の形態づくり
STEP3-2 (※3-1 と同時進行)	事業の立ち上げ・試行	・事業計画づくり ・連携・協働による実践活動 ・ブランドづくりの検討 ・商品・サービスの企画とブラッシュアップ

<事例集の構成(案)>

はじめに	・取り組みの趣旨、事業の経緯
対象地域の紹介	・やんばる3村、いいな3村の紹介と、拠点として選定された理由。 ・地域特性・地域資源(立地、人口、農業従業者数、特産物、観光資源 など)
推進組織の紹介	・推進組織の紹介(主な業容・業態、組織・構成員など)
各地域おける取り組み	・取組経緯と検討の流れ(広域交流拠点組織の立ち上げステップとの対応) ・段階ごとのポイントと展開上の留意点 ・地域間連携の推進上の課題とその対応
終わりに	・今後の課題など

3 事業実施フロー及びスケジュール

START

1. いいな3村・ヤンパクにおける広域交流拠点体制の活動実証

いいな3村

ヤンパク

(1) 体験交流プログラムの
実証

勉強会①（実施前）

【再委託】
体験交流プログラムのモ
ニターツアーの計画、実施
(2回)

勉強会②（実施後）

(2) 3 村連携体制に
よるコミュニティビ
ジネスの実証

勉強会①（実施前）

【再委託】
販売戦略会議の開催（3
回）
試作品の実証

勉強会②（実施後）

(3) 広域連携組織の
継続・展開に対する
活動の促進

連携組織設立のサポート
→「調整会議」を3回
開催

(4) 広域連携組織の
継続・展開に対する
活動の促進

- ・「ヤンパク」のブランドコ
ンセプトの確立
- ・「ヤンパク」での会員の
勉強会・交流会の開催な
ど活動の自走化
- ・体験交流プログラムの
「ヤンパク」内受入ネッ
トワークづくり
- ・効果的な情報発信と内容
の充実

→「調整会議」を3回
開催

2. 広域交流拠点モデル体制の普及に向けた事例集の作成

3. 報告書の作成

END

これまでの事業の進捗と本年度事業の狙い

(1)事業目的

- ・本業務では、グリーン・ツーリズムを活用した修学旅行等の大規模な受け入れに対応するため、受入調整や点在する地域資源の情報発信不足等の課題を解決できる環境を整えることを目的に、広域の受け入れ体制モデルづくりを実施する。

(2)平成 25 年度事業の成果

1) 3村共通体験交流プログラムの構築

- ・大規模の修学旅行への対応を意識した地域内で共通の体験プログラムを開発した。
- ・具体的には、大規模校の受け入れにも対応できるような2交体制のプログラム（「カヌー・シュノーケリング」と「グリーンベルトの植栽プログラム」）を開発。
- ・また、地域の体験を考えるテーマとして「環境教育・自然体験」「地域活動・地域貢献」「文化芸能・食体験」「その他（受け入れ時の交流 等）」という4つの軸を策定した。

2) 3村コミュニティビジネスの検討

①体験プログラム販売連携

- ・3村において提供されている体験プログラムを地域の施設やホテルにおいて販売委託する。
- ・販売手数料を地域施設に落とすことによって地域の一体感の醸成やグリーン・ツーリズムの進行を進めることを狙いとした。

②規格外野菜・果物の流通促進

- ・これまでにあまり流通していなかった規格外の野菜を県外で販売することによって農家の所得向上を図る取り組みとした。
- ・農業のみに留まらない地域の産品の集約拠点を形成することについても期待される。

3) 一元管理に向けた情報環境の整備

- ・情報の一元化に向け農家の情報や民泊、日帰り農家体験の予約情報について一元的に管理できる情報システムの整備を図った。
→ダブルブッキング等の予約ミスの回避、ウェイティング学校への効率的な営業による受注機会の増加。

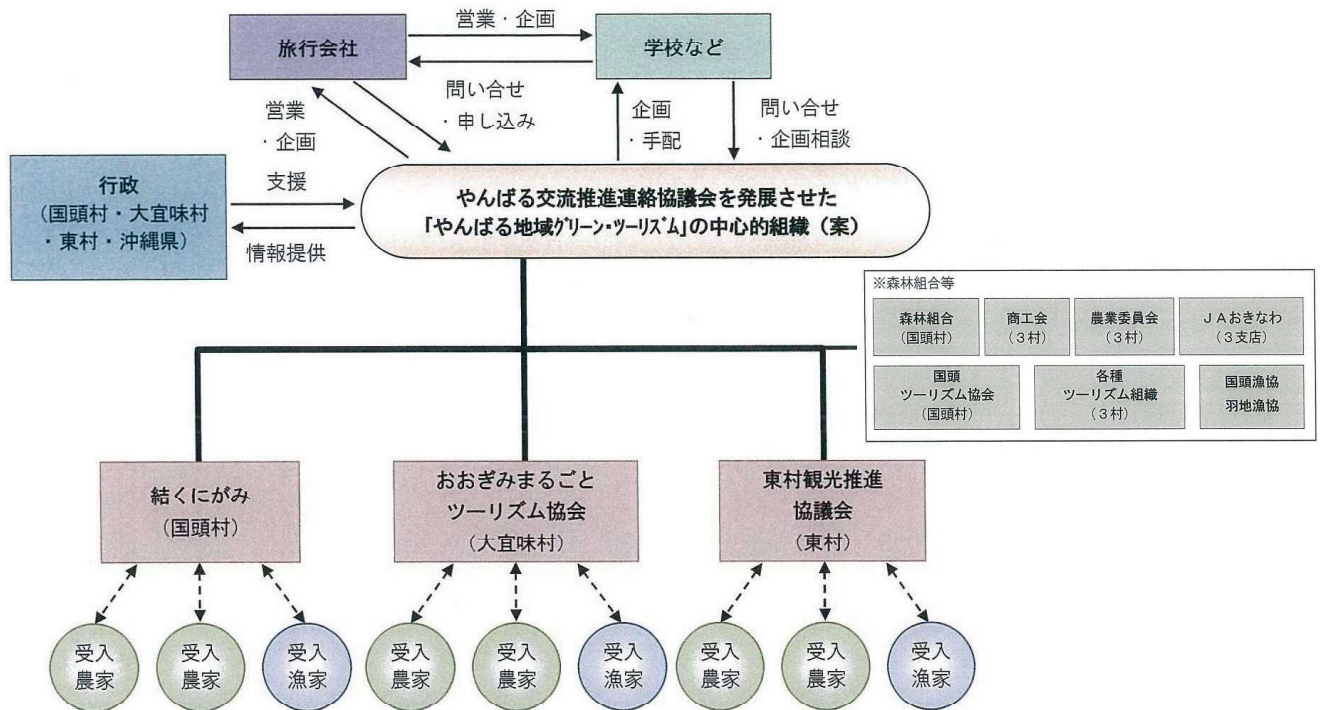
4) 情報発信のための広報活動への取り組み

- ・拠点の情報発信に必要な広報資材の検討し、ガイドブック・ウェブサイトを製作した。

5) 3村モデル組織体制の強化(モデル運用計画作成)

- ・拠点組織体制強化のための組織運営のあり方検討、関係者の意識啓発を行った。
- ・広域連携先進地との意見交換、広域連携の効果についての講演会、実践者ワークショップを実施した。
- ・ブランドネームの立ち上げ、運用計画（モデル案）の作成を行った。

◆やんばる3村におけるグリーン・ツーリズム推進のための組織・体制(案)



(3)平成 26 年度の動き(やんばる3村における動き)

- ・「やんばる交流推進連絡協議会 総会」(平成 26 年 6 月 30 日(月))における前年度の取り組みをオーソライズした。
- ・平成 26 年度「やんばる交流推進連絡協議会」及び「仮称・ヤンパク」事業計画書(案)による事業展開を実施中。

(4)平成 26 年度事業の狙い

- ・今年度は、25 年度の事業実績を踏まえ、モデル地域における広域交流拠点の体制のあり方や運用方法等の検討及び総合窓口として必要な企画の構築や商品の企画、情報発信等の取り組みを実施し、習得を図る。
- ・具体的に、本島地域の広域交流拠点体制モデルについては、体験メニューの企画力の強化やコミュニティビジネスによる販売戦略立案の習得を図る。

(以 上)

タスク		8月				9月				10月				11月				12月				14/1月				2月				3月			
		1W	2W	3W	4W	1W	2W	3W	4W	1W	2W	3W	4W	1W	2W	3W	4W	1W	2W	3W	4W	1W	2W	3W	4W	1W	2W	3W	4W				
1. いいな3村・ヤンバクにおける広域交流拠点体制の活動実証<ヤンバク>																																	
1-4 広域連携組織の継続・展開に対する活動の促進（ヤンバク）																																	
①第1回調整会議																																	
・日程の決定																																	
・会議準備・議題検討材料準備																																	
・会議当日																																	
②第2回調整会議																																	
・日程の決定																																	
・会議準備・議題検討材料準備																																	
・会議当日																																	
③第3回調整会議																																	
・日程の決定																																	
・会議準備・議題検討材料準備																																	
・会議当日																																	
④参考：地域イベント																																	
2. 広域交流拠点モデル体制の普及に向けた事例集の作成																																	
2-1 構成の作成																																	
2-2 素案作成																																	
2-3 事例集の作りこみ																																	
3. その他																																	
3-1 報告書作成																																	
3-2 打合せ・協議																																	

「ヤンパク」のあり方について

(1)これまでの経緯

- これまで、やんばる3村では民泊の受入連携を中心とした連携が図られてきた。
- 将来を見据えると統一窓口を立ち上げ、「地域一体」で受入対応を行うことが必要なことはこれまでも共通認識。
- これまでの検討経緯から、短期的にはこれまでの「営業経緯」や、受入民家さんの「経験や受入品質のバラ付き」、「地域としてのコンセンサス」などの面から拠点による完全な一元管理には時間を要するとの見解に落ち着いた。
- 一方で、連携を徐々に深めていくべく、受入民家同士の交流、情報交換、これまでに取り組んで来なかった体験プログラム分野での交流を進めていくべく検討を進めることとなった。

(2)今後進むべき方向性(会議の論点)

- 今後、5年後、10年後を見据えた際の、あるべき連携の姿とは？
 - ①人口減少や高齢化などが進むなかどのような目標をもつか？
(次頁参考値を参照。→赤枠部分の目標設定をお願いしたい。)
 - ②拠点はどのような形で、どんな役割を果たすべきか？
 - ③顧客からの視点で「やんばる」を活かして活動を継続するために必要なこととは？
 - ④人材育成のために必要なことは？
- ①～④について、検討をしていただきたい。(本日は意見交換)
- 観光需要は比較的安定推移するが、どうやって引き込みを行うか。
 - ⑤3村の目標を踏まえた、ヤンパクのコンセプトとは？
- 次回 WS 形式で深める。事前に意見交換をお願いしたい。(本日は趣旨の確認と意見交換。)

(以 上)

参考１ 将来人口と関連指標

	現況 2010年	5年度 2020年	10年度 2025年	参考
人口(人)				3村構成
・3村人口計(A)	10,201	9,103	8,586	
(現況比)	—	89.2%	84.2%	
国頭	5,188	4,623	4,359	50.9%
大宜味	3,221	2,856	2,685	31.6%
東	1,792	1,624	1,542	17.6%
高齢化率(%)				
・3村合算	26.1%	33.4%	37.2%	
農家数(世帯)				農家率=B/A
・3村農家数計(B)	815			8.0%
国頭	357			6.9%
大宜味	252			7.8%
東	206			11.5%
民泊受入数(世帯)				加入率=C/B
・3村計民泊民家数(C)	119			14.6%
国頭	24			6.7%
大宜味	35			13.9%
東	60			29.1%
民泊受入数(人)				(3村での割合)
・3村合算				0.0%
国頭				0.0%
大宜味				0.0%
東				0.0%

参考２ 観光客に関する将来予想

- ・沖縄県における観光客数は平成 33 年に 1,000 万人（現状の 1.4 倍）、観光収入 1 兆円（現状の約 2 倍）の水準を目指している。
- ・国内観光客数は、1.3 倍、うち、修学旅行者数は、1.1 倍の予想。